十勝毎日新聞

発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉓2222
©十勝毎日新聞社 1988

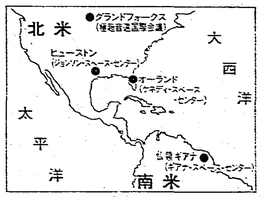
進む宇宙開発

スペースポート調査団同行記

……1

スペースプレーン、スペースポートを中心としたNASA（米航空宇宙局）、ESA（欧州宇宙機関）の宇宙開発の取り組みの現状と将来計画を把握する目的で日本マクロエンジニアリング学会スペースポート事業部会が初めて企画したスペースポート調査団（団長・松田源彦元内閣宇宙開発委員会専門委員）に同行した。九月十九日から十五日間、アメリカで開かれた第一回極超音速国際会議に参加、ケネディ、ヒューストンスペースセンター、日本人があまり訪れたことのないフランス国立宇宙センター（CNES）のギアナスペースセンターを視察した。威信をかけて事故後二年八カ月ぶりに再開したスペースシャトル打ち上げ前後のアメリカの盛り上がりを肌で感じ、欧州版スペースシャトル「エルメス」の打ち上げ施設となる宇宙基地を目の当たりにした。大樹町を中心とする南十勝でのスペースポート実現を期待しながら欧米の宇宙開発の実情を順次紹介する。（近藤　政晴記者）

調査団の視察地



スペースポート調査団　海洋開発など国際的な巨大プロジェクトの研究開発を行うことを目的に学識経験者や各関係機関、企業のメンバーで構成された日本マクロエンジニアリング学会の部会の一つ、スペースポート事業部会が企画。清水、鹿島建設などの日本のゼネコン五社、富士重工などの各メーカーの宇宙開発担当者のほか、道庁、岩手県、遠野市の代表ら二十人が参加した。

再生シャトル発射

まさに交信の最中

大事業の臨場感ひしひし

ジョンソンSCを訪問

☆――「順調」と元気な声

「実験の調子はどうだい」。ミッション・コントロール・センターのスタッフがスペースシャトルに呼び掛ける。返ってくるのは「ザー、ザー」という電気音だけ。前方を食い入るように見つめるスタッフ。三秒ぐらいの間をおいて「順調だよ」と宇宙飛行士の元気な声。一瞬、緊張したスタッフの表情が緩み、隣の別なスタッフに何事か話し掛ける。半円形状のテーブルにはメモ類が所狭しと張り付けられ、また一枚すぐに新しく付け加えられた。

調査団の一行が「こちらヒューストン」で有名なテキサス州ヒューストンのジョンソンスペースセンターを訪れたのは、米国の宇宙開発への威信回復をかけた再生スペースシャトル一号機「ディスカバリー」打ち上げ二日後の十月一日。このミッション・コントロール・センター（MOC、管制センター）では発射八秒後からスペースシャトルと交信中。訪れたのはまさに交信の真っ盛りの時期だった。あこがれの管制センターには入れなかったものの、数十㍍しか離れていないビジターセンターで、管制センターの模様をつぶさに伝えるテレビ画面の前にくぎ付けになり、緊張感を共有出来た。

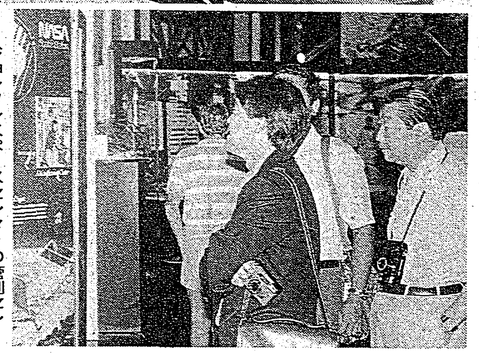
☆――どの顔も歓喜

「スリー、ツー、ワン、ゼロ」―。カウントダウンが終わり、ごう音とともにスペースシャトルを取り付けた赤い巨大燃料タンクが白い水蒸気を噴き上げながら青空に舞い上がる。二分後にチャレンジャー爆発事故後に改良された問題の固体燃料補助ロケットが分離、ケネディ宇宙センターの観望台の報道陣の様子やセンター周辺にぎっしりと詰まり、手をかざしながら見上げる見物人が映し出される。どの顔も歓喜の表情で満ちあふれている。

二十九日午前のこの劇的な瞬間、私たち一行は南米の仏領ギアナに滞在していた。前日にギアナスペースセンターの視察を終え、米国の上空にスペースシャトルが大空に飛び立つ〝雄姿〟の写真を掲載。ほとんどの学校で生徒たちが打ち上げの瞬間、テレビに見入ったこと、チャレンジャー事故で亡くなった遺族の喜びの声などを紹介。一日朝のテレビでは何度となく、シャトル内の宇宙飛行士の様子が映し出された。まさにスペースシャトル一色の感だった。

実際に足を踏み入れたジョンソン・スペースセンター内は、なにか張りつめたようなムードと打ち上げに成功した安心感が入り交じった一種独特の雰囲気。意外にも興奮した様子はなかった。ビジターセンター内の報道陣用と思われるオーディトリアムの前面スクリーンには世界地図の上に白い線と現在地を示す「X」印が映し出されている。「今、フィリピン上空だな」と西尾光夫さん（開発計画研究所地域環境研究室長）が指さす。わずかな時間の滞在だったが、宇宙開発という大事業の臨場感をひしひしと感じることが出来た。「発射場面に立ち合いたかった」そんな思いの一方で、米国の宇宙開発への再スタート現場を垣間見た喜びが全身にみなぎるのを覚えた。

（つづく）



ジョンソンスペースセンターの管制センター（上）と管制センターの模様を伝える画面に見入る松田団長（左）らメンバー